2003年度卒業研究

オーストラリアにおけるアジア系移民のアイデンティティ形成について

藤女子大学文学部
文化総合学科　0015005番
氏名　池田亜希子
担当教員　野手修

目次

はじめに

1．オーストラリアの移民の歴史
　a．オーストラリアにおける初期の移民政策
　b．白豪主義の台頭
　c．大量移民政策と同化主義
　d．多文化主義のはじまり
　e．オーストラリアのアジア化
　f．主流国民からみたアジア化

2．ポストコロニアル文学とアイデンティティ
　a．ディアスポラとハイブリディティ
　b．ポストコロニアル文学とは
　c．ポストコロニアル作家ブライアン・カストロ
　d．カストロの文化観

3．小説『アフター・チャイナ』
　a．古典的なアイデンティティ観
　b．中心と周縁
　c．他者との接触
　d．差異の経験と自己の再認識

おわりに

参考文献

はじめに

「モノ・ヒト」の移動・流通の高速化という、いわゆる移動革命、さらには情報伝達などのメディアの発達で世界との距離は昔と比べてはるかに近くなっている。海外旅行に行くことや街で外国人を見かけることはもはや珍しいことではない。交通、メディアの発展は、電話、テレビ、インターネットに代表されるように時間をかけることなく遠く離れた場所の状況を把握することを可能にした。このような状況は外国への移住をより容易にし、移民が増加する理由の一端となっている。自分の国を離れて外国に移住している人の数は、1985年の1億人から2002年には1億5000万人になっている。また世界の海外旅行者数をみていくと1950年には2500万人であったが、1990年には4億人に増加した。同様に日本の海外旅行者数は1985年の500万人から2000年で1782万人と増大した。確かにアメリカ、カナダ、オーストラリアなど移民が多く存在する多民族国家と対照的に、日本は同質的な国家にとどまっている。実際に上記の多民族国家と比べると、日本で生まれ育った人の数は外国生まれの人の数より圧倒的に多い。しかしながら「二十一世紀日本の構想懇談会報告書」によれば、日本も近い将来移民を持つ可能性が予想できるという。そこでは英語による国際対話能力の強化や、少子高齢化に伴う労働力不足を補うために、移民政策の必要性など「グローバル化」の必要性が強調されている。実際に、国際結婚などで日本に定住する外国人の数も増えている。このような状況が継続するとなれば、日本もカナダ、オーストラリアのような多民族国家になる日が来ることも予想される。

それにも関わらず、報告書は、日本が変化していくことなしに、今のままの環境で外国人労働者の数のみが増えていくことで、グローバル化への対応が可能であると予想しているようにみえる。しかし様々な文化が共存していく上で、個人の文化、アイデンティティをどう扱っていくかという問題は極めて重要である。移民政策と一口に言っても様々な種類がある。まず奴隷制度に代表される人種差別的な関係。次に同化主義政策が挙げられる。これはＷＡＳＰ的になることを期待されるように主流文化に同化することを強要されるタイプの政策である。さらに文化多元主義を提唱するホラス・カレンによって提起されたもので、民族の文化的多様性を認識して多様なエスニック集団が協力して共存していくことを促進する方法がある。最後はオーストラリア、カナダで実施されている多文化主義である。これは多様性の尊重を集団のレベルで追及していこうというものである。最後の二つは多様性を尊重する点で非常に似かよっているが、相違点は後者が核となる文化を認めず、

全ての文化を相対化することである。

この論文の目的は、包括的な移民政策が実施され、現在最も多文化主義が進んでいるオーストラリアで、アジア系移民という外見も文化背景も全く異なる人々がどのように自分のアイデンティティを形成していくかを移民によって書かれた小説を通して分析することにある。最初にオーストラリアにおける移民の歴史、白豪主義から多文化主義までの変化について紹介する。その際、現在増加中のアジア系移民の存在に対する主流と呼ばれるイギリス系オーストラリア人とアジア系移民の差異も考察する。移民問題は環境問題と同じように世界の国々と一緒に取り組まなければならない問題である。しかし、移民と自国民をどの程度まで同等に文化的、経済的に扱うのかという問題も避けることはできない。この点でオーストラリアで起きているアイデンティティ問題は極めて興味深い事例を提供するであろう。具体的には香港からの移民ブライアン・カストロによる『アフター・チャイナ』という小説を基に、ポストコロニアル状況における異文化間に生きる人々の帰属意識を考える。自分が生まれ育った場所ではないところでその後を生きていく場合、その新しい土地と生まれ育った土地の文化はアイデンティティを形作る際にどのような影響を及ぼすのかを明らかにしたい。議論を限定するために、移民によって書かれた小説からその手がかりを得ることにする。

1．オーストラリア移民の歴史

a．オーストラリアにおける初期の移民政策

オーストラリアは1788年にイギリスの流刑地であったが、1840年代には羊牧産業が発展したため深刻な労働力不足となった。そのため資本家たちは、インド人、南太平洋諸島の人々や中国人の移住を進めていった。しかしインド政府が労働条件が奴隷制度と変わりないとしてインド人導入を反対したこと、南太平洋諸島人には気候があわず、彼らはヨーロッパ式の労働に不慣れであったため、移住政策は失敗に終わった。

労働力不足のために資本家たちは積極的に有色人労働者を導入しようとしたが、イギリス政府や植民地総督は、イギリス人によるイギリス植民地としての社会の同質性を維持することを強調したため、有色人労働者導入はうまくいかなかった。当時はイギリスが増大しつつある人口を分散させるためにアメリカやカナダへの移住を薦めていた時期であった。植民地において低賃金労働者がイギリスやアイルランドからの移民の仕事を奪ってしまうと、イギリス人たちの移住意欲が失われて、イギリスの人口問題を解決できないことを危惧して有色人労働者導入に反対した。このように経済的、人道主義的なものが反対を支持する理由となっていった。

その頃白豪主義に基づく人種差別はあったとしても、流入人数自体が少なかったことと移住者の間にエスニックをめぐるアイデンティティ意識が薄かったため問題は表面化しなかった。また政府も公式な移住制限や法律を制定しなかった。(関根　1991：130~137)

b．白豪主義の台頭

1850年代にビクトリア・ＮＳＷ州を中心にゴールドラッシュが起こった。世界各国からたくさんの人々が金を目当てにやってきた。その中には多くの中国人が含まれていた。この中国人の急激な到来はオーストラリアに大きな社会的対立、緊張を生み出した。中国人金鉱掘りと白人金鉱掘りの間には行動様式の違い、中国人は集団行動をとる傾向があることなどや、服装、宗教、食事と生活水準の違いに人種偏見を起こし、相互のコミュニケーションが十分になかったために偏見は増大した。

ゴールドラッシュ時に、中国人金鉱掘りと競争しなくてはならなくなった白人金鉱掘りによる中国人への暴行が頻発した。このため中国人の移住を制限する必要が生じ白豪主義が広まったといわれている。しかし有色人種は、白人労働者に比べて賃金が安いために、

資本家が彼らを労働力として優先的に導入したため資本家、白人労働者、有色人労働者の間で利害の対立が起きていた。(関根　1990：137~150) 白豪主義が、一部の人道主義者と宗教関係者を除き、ほとんどすべてのオーストラリア人に支援されていたにも関わらず、有色人労働者は、経済発展のために必要であるといういことを理由に、北部地域への移住を認められ、積極的に導入されつづけていた。こうした対立の解決、統合化による政治的交渉力と自治権の拡大、そして経済全体の統一的発展のために 1901 年にオーストラリア連邦が結成されることとなったが、その年に白豪主義の根幹となる連邦移住制限法が制定されるなど、問題の解決には至らなかった。白豪主義は、イギリス・アイルランド系移民を優遇し、非英語系・非ヨーロッパ系移民の入国を制限し、また有色人の公民権も制限した。その目的は、有色人を対象にした移住制限法と南太平洋諸島人の国外退去により、白人中心の国家形成を実現することにあった。例えば、制限法は英語系を含む全ての人々に適応されるはずだったが、実際にはヨーロッパ系白人へは適応されず、主に有色人種がその対象となった。さらに移住希望者が受けなければならない書き取りテストの言語は英語ではなく、ヨーロッパ言語であった。そのため実際には、非ヨーロッパ人のみが不利になり差別を受けた。

白人労働者の経済的利益の確保と、人種に基づくオーストラリアの国民的アイデンティティが形成し、均質的な国家をめざして生まれたのが白豪主義政策であった。一時的な資本家の経済的な利益よりも、オーストラリア社会の人種的、文化的同質性を保つことが優先された。(関根　1990：185~206)

c．大量移民政策と同化主義

1947 年には白豪主義が維持されつつも大量移民政策が実施された。これは第二次世界大戦後の経済復興と人口増加率の減退のためであった。労働力不足のためイギリス系のほかに、低賃金労働者となる非英語系ヨーロッパ系移民や難民が多数受け入れられた。戦後の経済復興や労働力調達というオーストラリアの利益のみではなく、第二次世界大戦の被害を受けたヨーロッパ難民に対する人道主義的側面もあった。また戦前からのイギリス文化を普及させる目的も含まれていた。しかしこれは有色人にまでは適用されなかった。

政府は移民を選択する際に、移民がまず若い男性であることを重要視した。これは大陸防衛、内陸開発、さらに戦後の経済復興と経済成長のための兵力、労働力調達が主な移民受け入れ理由だったからだ。

次にオーストラリアの発展を目的とした移民受け入れのため、移民は永久移住を望まれていた。それと関連して、人種や文化、言語面でホスト国のそれらと異質性があってはならなかった。そのため最優先の移民はイギリス・アイルランドの英語系移民であった。

最後に移民はできるだけ郊外や地方の開発、産業発展のために労働力を提供することを期待された。これは都市のオーストラリア人との間に競合が生まれないようにするためでもあった。(関根　1991：238~253)

1947年から本格的にはじめられた移民導入当初は、イギリス人移住者が積極的に受け入れられた。しかし、イギリス人のみでは目標の年率 2%の人口増加を達成するのが不可能とわかり、ヨーロッパ難民に政府は注目しはじめた。オーストラリア文化に同化しやすい西・北部ヨーロッパ系移民を優先していたが、その後ヨーロッパ自体の経済復興のために、彼らはヨーロッパの労動力となった。さらにヨーロッパ難民全体の数が減り、その結果、労働力確保のために同化可能であることを条件に南、東ヨーロッパ系移民を受け入れた。しかし、ヨーロッパからは地理的にも遠く、同化が強調されるオーストラリアは渡航のための費用もかさむため徐々に敬遠されるようになった。そのためオーストラリア政府は移民供給地域をアジアまで拡大し、アジア人、あるいは中近東やトルコの人々も一定の基準を満たせば移民として受け入れられるようになった。1960年代になると、白人と有色人の混血または有色人でも高学歴等で同化可能とみなされれば、移住や定住が可能になった。1959年には有色人の市民権獲得も可能となった。その後評判の悪かった人種差別的な「指定言語書き取りテスト」も廃止された。1966年には白豪主義を支持するメンジーズ首相が引退し、「移民法」と「国籍および市民権法」という有色人に門戸を開く法律が成立した。その法律による移民としての基準は、国内の労働者との摩擦をさけること、オーストラリア文化に適応できることというように、オーストラリア社会の同質化を維持するという目的があった。この年代は常に起こりうる労働力不足と戦後の経済発展のため、人種差別政策から同化主義的な政策へ政府の関心が移行しつつある時代である。しかし有色人移民の制限が大幅に緩和されたために、白豪主義の終わりに近づきはじめたといってもいいだろう。1975年には人種差別禁止法も制定された。これは人種差別は未だ残っているとはいえ、白豪主義時代の終わりを示すものと考えられる。(関根　1990：253~275)

d．多文化主義のはじまり

非英語系移民たちの数は膨大なものとなっていた。1976年には移住者総計約 7 万人の

うち 15. 4%がアジア系移民であった。(関根 1991：378) 彼らは同化主義に反対し、自らの言語や文化の維持を訴え始めた。それに対して政府は、リベラルで多元主義的な「統合政策」を打ち出した。しかし、60年代半ばに打ち出された統合政策は同化主義的であるといわれる。その結果として、異文化の存在に対して寛容な態度を発展させ、オーストラリアの文化を基本にして融合をすすめようとした政府の意向があった。50年代から60年代にかけて同化主義が問題視されることはなかった。実際には政府の意向も十分に機能を果たさず、南ヨーロッパからの移民は同化せず、東ヨーロッパからの移民は祖国の文化に強い愛着があることがわかるなど、同化主義はその不充分さを認識し始めたことによってはじまった。また同じ時期、移民や難民が英語を十分に身につけられないことや、オーストラリア文化に適応できないのは、彼らにまかせっきりで制度的に十分な援助がされいなからだという認識も高まった。その結果 70 年代前半には「多文化主義」へと変更がなされ、文化相対主義が強調され始めた。この時代は石油危機があり、経済が低迷しはじめて移民・難民の受け入れは減少し、大量移民政策は休止された。経済低成長あるいは安定成長の時代に入ったために、大量の移民労働力は必要なくなったからだ。そのため移民政策の目的も労働力調達から移民してきた家族の呼び寄せや人道的難民保護に変わっていった。

同化主義時代には英語教育とオーストラリア文化を受け入れることが重要視されていたが、文化的差異に適応できない人々、英語力不足のために起こる職業選択の不利など、同化主義のみでは解決できない新たな問題点が指摘され始めていた。そのため、多文化主義導入による人種差別禁止法の制定や英語教育の充実が期待されたのである。(関根 1990：347~362)

e．オーストラリアのアジア化

70年代後半以降、多文化主義の充実が進められた。今まで周辺に位置するものとされてきた人々が、その権利と平等な地位を求めて運動を起こすことが一般化してきた。1978年から本格化したインドシナ難民の受け入れにより、人口は多様化・異質化し、国内に大きな影響を与えた。インドシナ難民の受け入れは東南アジア地域の政治的安定にとって重要だったため、難民が有色人でもその受け入れは避けがたかった。しかしこのインドシナ難民受け入れは世界にオーストラリアが本当に白豪主義的な移民政策から脱皮したことアピールするよい機会であった。さらに東南アジア諸国や第三世界との関係改善のために、移民や難民の受け入れが当面の間有効であった。オーストラリアは先進工業国でありなが

ら、第一次産品輸出国であるからだ。そのため移民・難民の受け入れは、東南アジア諸国の社会的、経済的負担を取りのぞくだけでなく、オーストラリアのイメージを向上し、国際政治の場で発言力を高めることができる。しかし、これはすでにヨーロッパからの移民で多文化社会化しているオーストラリアにさらなる異質化をせまるものであった。(関根 1991：374~394)

オーストラリアへのアジアからの移民はインドシナ難民ばかりではない。アジアからの移民には大きく分けて２種類ある。一つはＡＳＥＡＮ、特にシンガポール、マレーシアを中心とした教育レベルが高く、職業と収入も高いものに就く可能性の高い人々と、近年増加している難民である。最近ではベトナム、ラオス、カンボジアからが多い。

一般に、オーストラリア人はアジア系移民や難民は教育レベルが低く、不熟練労働者になりやすいというステレオタイプを持っているが、ＡＳＥＡＮ系の移民には全くその傾向が見られない。逆にオーストラリアの発展に貢献する場合もある。それ故オーストラリア側からの視点でみると、ＡＳＥＡＮ系移民の受け入れによって利益を受けるが、インドシナ難民を受け入れることによって社会的コストの支出が増加することとなる。(関根 1991：380~386)

外交的にはＥＣに加盟したイギリスとの関係の減少が進むにつれて、アジア・太平洋諸国との政治的・経済的な関係が強まっていった。1980 年代にはアジア・太平洋諸国との経済的・政治的結びつきはさらに強まっていった。またキーティング首相によるイギリス植民地時代の名残である立憲君主制から、大統領制をもつ共和国化をめざす動きが起こった。1994 年にその支持者は 4 割を越えた。

ｆ．主流国民から見たアジア化

しかしながら、急激に増加するアジア系移民や民族的変化に対応できない主流とされるイギリス系オーストラリア国民は移住制度に反論しはじめた。その例としてメルボルン大学教授ブレイニーやワンネイション党のポーリン・ハンソンがいる。

ハンソン論争は 1996 年にハンソン連邦下院議員がオーストラリアの先住民やアジア系移民に対する人種差別的演説を行った結果始まった。「1980 年代より増加したアジア系移民によってオーストラリア人の職が奪われている。いずれオーストラリアはアジア人にのっとられてしまうので、アジア移民を制限すべし」(関根 2000：132) などと人種差別的発言を続けて、自由党から除名を警告された。しかしこの主張を政策化として生まれたの

がワンネイション党である。彼女は予想に反して多くの支持を集めて当選した。この現象は 1996 年の彼女の初演説直後から 1998 年に落選するまでの 2 年間国際的にも大きな関心をひいた。彼女は右翼政治活動家としての経験はなく、もともとはフィッシュアンドチップス屋の店主であり、庶民的な出自のため人気を呼んだ。

ハンソンの議会初演説が収められている議会記録「ハンサード」から主な内容を抜粋する。

「・今後、移民制度を見直し、多文化主義を廃止すべきである。1980 年代からアジア移民が急増し、その結果、オーストラリアはアジア人に飲み込まれてしまうし、アジア人の同化を求めない多文化主義は社会の分裂を生み不安定化させる。

・　多文化主義も財政負担になるので廃止し、移民の同化を促進すべきである。失業の多い今日一時的に移民を停止し、かつ、英語を話せないものを移民させないようにすべきである。このことによって失業を減らすべきである。」（関根 2000：133~134）

ハワード首相が、ハンソン議員を批判した際に認めたように、彼女の主張は今日の急速な変化に見舞われた人々の「不確実な時代に対する、不安と焦燥」を代弁したものである。（関根 2000：134）

ハンソン論争のほかにも、多文化主義にいたるまで大小様々な論争があった、そのひとつが 1984 年のブレイニー論争や 1988 年のハワード論争である。ブレイニー教授は、問題はアジア難民、移民の流入の量とスピードにあり、それがオーストラリア人に意識、態度において急激な変化を要求させることになるので、否定的、反動的な拒否反応を起こさせてしまう点である。彼は文化不安を訴えたが、多文化主義反対とまではいかなかった。

このような批判は、異なる文化を持つ移民の急激な増加により、イギリス系移民たちに対してオーストラリアのアイデンティティへの不安と、昔は白人の経済的利益が確保されていたのに対し移民の第二世、三世は英語を身につけて社会的に上昇し、もはや文化的分業がなくなったことにも関係する。また失業率が増加していることもあり、移民・難民等への反感がその背景にあった。

「多文化主義は、移民・難民あるいは先住民族の文化・言語を維持することを主眼の一つとしているわけだから、多文化主義政策が充実すればするだけ文化・言語維持は成功する。さらに、移民・難民集団にしてみれば、どれだけ自らの文化・言語を維持しているかによって援助も多くなるわけだからエスニシティや民族性をより強調していくことになる。この結果、多文化主義が成功すればするほど主流国民からは、主流文化が脅威にされされて

いるようにみえる。」（関根 2000：186）

主流文化の人々は、一部の人々のために膨大な予算がつぎ込まれていることに不満や疑問を感じるようになった。多文化主義はすべての文化を保護しているのだから、主流国民文化も保護されて当然との主張も聞かれるようになった。このような複雑な歴史環境の中で、アジア系の移民たちは自己をどうとらえているのだろうか？以下ポストコロニアル状況における文化形式に言及しつつ、多民族社会におけるアイデンティティについて考察する。

2．ポストコロニアル文学とアイデンティティ

a．ディアスポラとハイブリディティ

オーストラリアのような多文化社会では、そこに住む人々のアイデンティティをどのように考えるとかということはより複雑になっていく。日本で生まれたから、日本人の両親を持っているから自分は日本人であるというような従来の考えとは異なる、国を単位とした意識を超える新たなアイデンティティ意識がある。多文化主義社会は、文化の異質性があることを知る一つの機会であるとも言える。

このような多文化社会化における特徴の一つとしてハイブリディティが挙げられる。もともとの「ハイブリッド（hybrid）という用語の語源は、ラテン語のヒブリダ（hibrida）という語で、これは、『不自然』『二つの異なる種から生まれた動物』『ローマ人の父親と外国人のあいだ、または自由人と奴隷のあいだに生まれた子』を意味している。」（戴 1999：102）現在は主に言語や文化の現象の場面で、雑種性などとよく使われる言葉である。

もう一つはディアスポラ(diaspora)である。この語源は、「ギリシャ語のディアスペイロ(dia-speir-o)という語で、それは異なるさまざまな方向に種をまき散らすということを意味している。この言葉は、歴史的に離散状況におかれてきたユダヤ人を指すのに用いられてきたが、近年になって地球規模で移動するさまざまな人びとの経験を形容する言葉として使われるようになってきた。」（戴 1999：113）

この二つの言葉が頻繁に使われるようになった背景には移民、難民の存在が増えるにつれて実際に文化の雑種化が進んでいることがある。

b．ポストコロニアル文学とは

ビル・アッシュクロフトは『ポストコロニアルの文学』の中で、「『ポストコロニアル』という言葉を、この本では、植民地化された時点から現在に至るまで、帝国主義のプロセスにさらされてきた文化の全体を指す言葉として用いることにする。」（アッシュクロフト 1998：12）としている。またポストコロニアル文学に共通するのは「植民地主義体験の渦中から現在の形式を生み出してきたことや、ヨーロッパの支配力との緊張関係を前面に押し出し、帝国の中心が掲げる文化的前提との差異を強調することによって、その存在を自己主張してきた点などに認めることができる」（同上 1998：13）とも述べている。

植民地時代は支配するものと支配されるものという構造であったため、文学は支配する

側のもので、支配される側には文学を通して表現する機会はないに等しかった。またあったとしても、支配する側に表現を削除や、制限されるというコントロールの下であった。現在のポストコロニアル文学はこの制限をどのように壊して、自らの文学を作り上げていくかということに重点が置かれている。

また植民地時代の言語、英語について『ポストコロニアル文学』の中では、イギリスの標準的な英語と元植民地の国々で使われている英語とを区別して表記されている。「これら『周辺』の言語を形成したのは、とりもなおさず、権力側の抑圧的な言説であった。しかし一方、この『周辺』は、現代のもっとも刺激的で革新的な文学のいくつかを生み出す現場ともなってきた。」（アッシュクロフト 1998：23）と著者は述べている。本論で分析するブライアン・カストロの『アフター・チャイナ』という小説もこの「周辺の文学」の一つといえるだろう。彼は、イギリス領であった香港に生まれ、オーストラリアに移住している。また小説の主人公もカストロのように中国からの移民と設定されている。

アッシュクロフトはポストコロニアル文学における重要な点として、場所と転位についての関心をあげて、「ポストコロニアル的な状況に特有のアイデンティティの危機意識、つまり、自己と場所との有効な同一化の関係をどのように発展させるか、あるいは回復するかという問題関心である。」（1998：23）と述べている。確かにアイデンティティの問題を考えるとき、場所はそれほど大きな意味を持たなくなりつつあるようだ。ヒト・モノの移動が自由で高速化したこたこともそのことに関係しているだろう。インターネットが普及したことによって、あらゆる情報を瞬時に得ることができる。そのため自分がどこにいても、祖国とのタイムラグなしに自分が持っている情報をアップデートできる。一つの例として中国人を見てみると、彼らは世界中のあらゆるところに移住、ビジネス、教育のために拠点を置いて、国籍さえも変える。仮に生活の拠点を中国以外に置いたとしても、電子メールや電話と通して友人や家族とのコンタクトまた祖国に帰ることさえ困難なことではない。そのためどこに生活の拠点を置いていようと変わらない中国人としてのアイデンティティが保たれるであろう。

c．作家ブライアン・カストロ

ブライアン・カストロは 1950 年香港で生まれた。彼の父親はポルトガル、スペイン、イギリスの血をひき、母親はイギリスと中国の血をひく。カストロは幼い頃英語、広東語とポルトガル語が使われる家庭で育った。彼は 1961 年にオーストラリアの寄宿舎に送ら

れて主にオーストラリアでその後過ごした。パリと香港にも数年住んだが、現在はオーストラリアのメルボルンに住んでいる。カストロはオーストラリア、フランスと香港で教師と作家として働いている。また数年 Asia week magazine の文学批評をしていた。

1970 年、シドニー大学在学中から作家活動をはじめ、1983 年に彼の最初の小説 *Birds of passage* は Australian Vogel Award を含むいくつかの賞を受賞した。その小説はフランス語と中国語に翻訳されている。この論文で取り上げた四番目の小説、*After China* は、Vance Palmer Award を受賞した。

カストロは植民地オーストラリアでの中国人としての経験を小説に取り上げた最初のオーストラリア人であった。彼はインタビューでアジア人、中国人、オーストラリア人と自分がさまざまに自分が呼ばれること、また人々が彼を見たときに中国人の外見をしていないことに驚くことに落ち着かないと述べている。彼自身のハイブリディティは依然として継続する体験上の事実なのであろう。

d．作家カストロの文化観

エッセイ、“Writing Asia” の中でカストロは「アジアとは、異なる言語と文化と政治をもつたくさんの国の複合物だ。しかし最悪な意味では悪用を含む人種差別的な言葉として、または曖昧な地理的用語だ。」(カストロ 1995)と主張した。オーストラリアは地理的、言語的そして人種的な混乱という長い歴史を持っている。

彼は言葉なしではだれも生きていけないという。1983 年、彼にとって最初の小説の出版のあと、彼はラジオの多言語放送を提案し、当時のオーストラリア社会を活発に風刺した。

「現在のオーストラリアは、アジアがオーストラリアを必要としているよりもアジアを必要としているようにみえる。西洋は一つのポストモダニズムの終わりのようで、創造的で、文化的なアイデアを十分にもう持っていないようだ。しかしアジア諸国は新しいハイブリティティ、スタイルの混合と並記の集合とオーストラリアの芸術、音楽、言語との変化によるチャンスによって生きている。

オーストラリアは、アジアをこの 200 年間書きつづることによって修正不可なまでに壊してしまった。今はアジアについてよりも、アジアの中で、アジアを書く時期だ。もしオーストラリアがアジアの一部になるために、アジア諸国との関係を再構築したいのならば、同じようにアジア諸国もオーストラリアの一部にならなくてはいけない。」(カストロ 1995) とオーストラリアとアジアについて語っている。

Road to East Asia のインタビューの中で、カストロは国外生活とハイブリット文化について次のように表現している。

「彼は外国の影響によって低下するものは何もないと考える。文学はむしろ高まるといえる。言葉は世界で恩恵や利益がその豊かさの中にある。

オーストラリアはアメリカ、カナダなど移民の国に比べて特有のアイデンティティの問題を抱えている。オーストラリアはまだ共和国ではなく、共和国という言葉だけを孤立させている。それを恐れるアングロサクソン系は中国の小説やその他の外国の作品をそのアイデンティティ問題への不安から、外国のもの、エキゾチックなものとしていまだに位置づける。いくつかの中国人作家の作品がアングロサクソン系の人たちが考えている東洋学に分類されることにいらだっている。」（カストロ 1995）

カストロは作家にとって一つの要素に属することはまちがった信念であり、小説家はいつも異国をさすらうべきだと考えている。「香港はある意味で海外生活の完璧な場所である。それはやがて来る返還による混乱の州であるためだ。」

彼は海外生活をしている作家は、ヨーロッパ人を長い間魅了していた、閉ざされた東洋について目を向けることに役立っていると考えている。「彼らは新しい空気をもたらし、文学について新しい方向を提供した。海外生活、ハイブリディティ、移民はますますはっきりときわめて優秀な文化経験の形と表現と 21 世紀にはなっていくだろう。自分の家に閉じこもるナショナリストはとても流行おくれのものになっていくだろう。」と発言した。

彼は、起源とアイデンティティの範囲を広くする必要性も主張している。本当の質問はいつも誰が誰に対して求めているのかということだ。彼は、アイデンティティを作家に強制するのは不公平だと考えている。「オーストラリアの作家は明らかにオーストラリアとどこかで出版されたいので、この結果はしばしば精神分裂だ。そして物質的なサポートは微妙に批評と共存しなければならない。これはひとつの開かれた社会の定義で、書くことは国家がよく感じる意向の必要な対立法である。そして私たちがさらにハイブリディティ、コスモポリタニズム、国際主義を歓迎することで、よりよい小説ができるだろう。」（カストロ　1995）と述べた。

彼の中には、たくさんの自分がいて、その中のいくつかは絶えず自分が生まれた場所や中国系イギリス人の母などのところへ戻る。彼は言葉がすべてのアイデンティティの不安の鍵だと考える。作家は言葉の中で働き、言葉と文化の間での対話だ。たとえ他人がどのように自分を一定の要素に適合するようにステレオタイプと共に自分を見たとしても、自

分の肌はそれと何の関係もないという。

「ハイブリディティはプラスであって、マイナスではない。もっともホストはしばしばハイブリッドにそのように感じでほしいのだが。ハイブリディティは複合的な自覚の開花であり、そしてたびたび矛盾している。自分自身の中のもがきや努力は最もよい文学の目的だ。それが芸術的にうまく行かない時は、不幸にもこの内部は劣ったものに変わってしまう。ハイブリディティが繊細な面を加えている間、そのハイブリディティという言葉自体は、幾分不安にする。

ナショナルアイデンティティが文化戦争の中で武器として使われるようになった時、非伝統的、非同化的、非同情的であることはとても困難なことである。

たとえ私が用語の意味での、国外生活者ではなくてもわたしは一人の国外生活者でありたい。」（カストロ　1995）とインタビューの最後で語った。

3．小説『アフター・チャイナ』

a．古典的なアイデンティティ観

「あらゆる移民が迫られる古典的な問いは次の二つ、『なぜおまえはここにいるのか？』、『いつ祖国に帰るのか？』二番目の問いに対しては、どんな移民も聞かれるまで答えを知らない。聞かれて初めて、彼女なり彼なりは、深遠な意味で、自分が決して帰ることはないだろうということを、現実に悟るのだ。移住とは片道旅行。帰るべき『祖国』などない。そんなもの初めからなかったのだ。」[1]（チョウ、2000：226）このスチュアート・ホールの発言に見られるように、古典的に考えるとアイデンティティは一度形成されると変わらず、たいていは生まれた場所に属するものを考えられていた。それは主流国民からは、移民は周辺に位置しいつかは祖国へ帰るものと考えられていた。しかし現在は移住という方法を使って異なる場所で生活が可能であり、生まれた土地に帰るとは限らない。その新しい土地に愛着を持つ移民さえいる。

『アフター・チャイナ』は中国出身でオーストラリアに移民した建築家ユーボクマン（You Bok Mum）とガンに冒されているオーストラリア人の女性小説家サラ（Sarah）の話だ。次の場面はそのオーストラリア人女性が中国出身の彼になぜ中国からオーストラリアに滞在地を変えたのかたずねているところだ。

'Why did you stay?' ... 'I don't know. ... I knew that if I didn't leave I would turn into something else. Isolation, the kind of isolation. China was heading into, confused the very basis of existence. You had nothing to measure yourself by, and what you thought was morally imperative became compromise and self-deceit of the worst kind. But if you left you could do nothing either. This has always been the Chinese dilemma. (66)

この二人の会話にも見られるように、オーストラリア人の彼女は生まれ育った場所に定住あるいは戻ることを正常なことと考えているのが読み取ることができる。そのためになぜ中国からオーストラリアにやってきたかを不思議に思い尋ねている。彼ははじめに中国に特に滞在理由するがなかったからだというが、もし中国を離れなかったら何か違うもの、孤立のようなものになってしまうとわかっていたからだと話し出す。中国にいることによ

って、存在についての混乱に向かってしまうからだと話す。しかし、中国を離れることによって何かできるわけでもなく、それが中国のジレンマだという。彼の特に決定的となる理由をなしに移住を決められるということの背景に、最初に述べた情報と輸送の高速化・移動の自由化がみることができる。また存在、自分のアイデンティティに何かしらの不安を感じていることがわかる。しかしながら、中国にいても、また中国からでてもその不安の原因を自分ではっきりとわかることが難しいとも読むことができる。『ポスコロニアル文学』の中では「<他者>の構築とは、じつは深い自己矛盾をはらんだプロセスである。そしてこの矛盾から、両価性の不安ともいうべき心理が生じる。またこの根本的な矛盾によって、植民地言説をそれ自身の内部から破砕することも可能になる。」(アッシュクロフト 1998：185) と書かれている。小説の主人公の発言はその不安の心理状態を示している。

b．中心と周縁

以下はサラが彼の建設したホテルは中心 (heart) がないと話しだした場面である。

'When you have spent your life in hotels, the heart does not acknowledge home.' ...He could barely understand what he means by home. ... He had purposefully designed the hotel without a heart or center and it was this idea, that he was part of an indistinct and wandering tribe, which comforted him. (67)

下記はユーボクマンの建てたホテルの場所とデザインについてである。

The hotel ran with the wall, out to sea. There were no enclosed courtyards, no circles, no centres or comforting squares. 'When I built it,' he said, 'I wanted people to be lost in it.' (16)

彼がデザインして建てたホテルは暖炉や柱のような中心となるものがない。また彼は家というものが意味するものがわからないという。この二つの場面は「ポストコロニアル文学は、『英語』に与えられた特権的な中心性を破棄する方向へと向かってゆく。またそれは、それ自身が理解されるだけの言語的な同質性は維持する一方で、同じ言語を、差異性を表示するために用いる」(アッシュクロフト 1998：95) という中心を破棄して新しいもの

をつくっていく行為と「ポストコロニアルの国々にわたしたちがみいだすのは、危機的な空虚さである,」という空虚なイメージを表しているだろう。主人公の彼は家を安らぐ場所、帰るべき場所というように捉えていないように見える。家（ホーム）はどこから来たか、どこに自分の帰属意識を置くかなどアイデンティティを考える上で重要な概念である。しかし祖国に帰らなくても,家族や友人との交流により新しい土地でホームを懐かしむことや、いくつかのホームを持つこともディアスポラを体験すると可能になる。そのためディアスポラ経験を持つ人々にとっての家はもはや中心的な存在ではないのだろう。中心のないホテルはその家の存在や自分を一定の場所に定義できないことを表現している。ホールは起源にこだわる従来の同一性に基づく固定したアイデンティティを批判し、「ディアスポラ・アイデンティティとは、変化と差異をとおして絶えず自己を再生産しつづけるもの」[2]（戴 1998：118）と述べている。主人公のユーボクマンも中国、フランス、オーストラリアでの自分の建築家として異なる価値観があることや文化を通してディアスポラ経験があるので従来のホームという考えとは違う新しい意識ができあがったのだろう。カストロは小説の中で「purposeful emptiness」をいう言葉を使っている。ユーボクマンがホテルをデザインしているときに、人々にその中で迷ってほしかったといっているところから、主流とされる人々にもこの中心のない空虚なものを経験してほしかったとも読み取れる。また中心がないホテルを周縁にいるべきとされていた移民である主人公がたてたことは、オーストラリアにおける中心と周縁の距離に変化がおきていることも示している。「社会文化的空間の概念は垂直型ではない、水平型といえる。上下関係から、中心と周縁という関係に変わる。中心に近づけば近づくほど権力を持ち、周縁に位置する人は支配さる側になる。社会的に力をつけていくということは、周縁からより中心に移動していくということである。これはいかに個人が中心の価値観や文化を理解し身に付けるかということに大きく関係する。」（センプリーニ 2003：105）この『アフター・チャイナ』の中のホテルはこのような社会文化的空間を示唆している。移民は植民地時代のようにもう一方的に支配されているのではなく、周縁にいながらも中心を圧倒する力をつける者が増えている。

c．他者との接触

マイノリティの人たちの意識は、「共有する価値体系や共通の生活様式、集団的アイデンティティ意識や共属感情、あるいは周辺化されているという意識に基づいて成立している。排除されている、社会から否定されているという共通の経験によって成立している。」（セ

ンプリーニ 2003：45） マイノリティ化のはじまりには二つの方法がある。一つは、マイノリティの集団が自分たちをマイノリティとして自覚することで、もう一つは外側から、周囲からマイノリティとして認知されることである。私はどちらの場合も自分たちと他者というものがあって、両方の接触によって成り立つものだと考える。

「一個人のアイデンティティは、他者と接触することでどのように形成されるか、このことを示すために『対話主義』の観念が用いられる。絶えざるやり取りをつうじて、他者との比較や違いによって自我―自分自身―が形成され、定義される。個人としての『自我』は、他者との相互行為にある個人によって形成され、積極的に相互行為にかかわるものである。」（センプリーニ 2003：102）

小説の中で主人公は建築家である。彼は建築家とは芸術家だと思っているが、中国の大学の指導教員からは建築家とはエンジニアであると教えられて、意見の食い違いが生じその後フランスに留学する。

Two realities already: to create is also to be created. To have designed a building is also to have changed something in oneself. That's the only sign he ever followed.. his intuition.(17~18)

この主人公の発言は自分の建築家としての矛盾、建築家であることと、エンジニアであることを示しているだろう。またつくることはつくられることであるということは「対話主義」の観念をも説明できる。これは自分と他者という二つの要素があり、お互いの存在によって変化すること、自分のアイデンティティを見つけていく過程だと私は思う。建築物そのものやそのデザインは作者、ブライアン・カストロのアイデンティティを表現しているように見える。カストロにとっての小説を書くということ、小説の中の主人公がホテルを建設することを通してどちらにも共通する移民としてのアイデンティティを見ることができる。「アイデンティティや差異性の記号は、つねに創造あるいは構築の産物なのである。」（アッシュクロフト 1998：102）ということからもわかるように、建築や小説などの創作活動を通してアイデンティティを探しているのだろう。

d．差異の経験と自己の再認識

次はユーボクマンとお互い好意を持っているサラがお茶を飲みながらおしゃべりしているところだ。

'Maybe you're sensitive. Sensitive and precocious.' Then pause and he continued: 'And then again, perhaps I'm Chinese.'

What did he mean by that? ...He meant, of course, that barrier. Some people kept away from foreigners. Others wanted to help them. He saw everything so clearly. ... 'I'm on the verge,' he said, 'of my greatest work.'(76)

これも他人との接触によって自分のアイデンティティを探る例ととれる。相手とのやりとりにより、自分が外国人であることを自覚することができる。個人のアイデンティティが、最初に帰属意識をもった集団に固定されるとしたならば「主体のアイデンティティ体験の限界」をも示すが、(センプリーニ 2003：104) アイデンティティの変化や移動の可能性は他者との出会いによってである。差異の「経験によって個人が自らのアイデンティティから『距離』をとったり、アイデンティティをゲームの切り札として用いたり、他のアイデンティティの流れと比較しながら自らのアイデンティティを発展させることもできるからだ。」(センプリーニ 2003：105) 主人公は実際に経験をして自分がオーストラリアでは異質である、または周辺に位置しているという判断を自分にしている。「ポストコロニアルのテクストは<他者性>の状況のなかから書くことにより、複雑に交錯しあう『周辺』の複合体を、現実経験の内実として主張する。」(アッシュクロフト 199：143) これはカストロのこの小説の主人公そのものといえるだろう。

「周縁そのものが持つ膨大な創造的エネルギーに圧倒されるようになった」[3] (戴 1999：110) とホールがいうように、主流国民とマイノリティの間に変化が起こってきている。オーストラリアの歴史で見てきたように、以前の白豪主義のような動きから明らかに変化した主流国民とマイノリティの関係がある。それは小説の中のホテルに表されたように、中心と周縁の関係の変化、マイノリティのエンパワーメントを引き出す基盤となっている。

おわりに

この論文はカストロのエッセイと小説の分析を通して、自分の文化観とは異なる場所で生きる場合のアイデンティティ形成を自己の内部での変化や、葛藤をある小説を例にとり明らかにした。自己の存在とは他者の関係なしには成り立たず、その接触により新たな自己を探求できる。

第１章ではオーストラリアの白豪主義から多文化主義までの移民史を述べた。今では移民国家のロールモデル的な存在であるオーストラリアが、イギリス流刑地としてはじまった当時は白人至上主義であり、労働力を補うことだけを目的に移民を導入しはじめた。現在はその頃からは想像できないほど多様化した多文化国家となり、移民導入の目的は経済的理由よりも難民、家族呼び寄せという人道的なものが中心となってアジア系移民の数が増えている。急激に増加するアジア系移民に対する主流国民のアイデンティティにも触れた。

第２章は、ポストコロニアル文学と進む国際化と情報化によって生じた新しいアイデンティティ観を論じた。植民地時代には支配する側のものであった文学を、現在のポストコロニアル文学はその制限をどのように破壊するかに重点を置いてつくられている。さらに、そのような時代を表現するポストコロニアル文学の一例としてポストコロニアル作家のブライアン・カストロの文化観について彼のエッセイを通して述べた。彼は三か国語が使われる家庭で育ち、香港からオーストラリアに移住した。エッセイではオーストラリアとアジアについて述べてあり、アジア諸国のエンパワーメントと彼自身の経験に基づくアイデンティティへの不安と矛盾を主張している。さらにはハイブリディティの新たな可能性に言及している。

第３章ではカストロの『アフター・チャイナ』を分析し、ポストコロニアル時代におけるアイデンティティ形成について、従来のアイデンティティ観とハイブリディティ、ディアスポラに代表される新しいアイデンティティ観の比較、マイノリティのエンパワーメントによる中心と周縁の変化、そして他者と自己の関係を通して考察した。

カストロはインタビューで「言葉は他者との場所を横切るもの、またはそれが行われるボーダーである。それぞれの言葉はそれぞれの世界を持っている。多言語に通じた人々は自由で、制限のない想像的な世界と言語に生きることができる。私達がある言語からもう一つの言語へ訳すとき、私達は自分自身を再発見するだけではなく、自分たちの言語の制

限から自由になる。私達は超えること、変形させること、また異様な経験をすることによって自由になる。私達は失うことによってより多くを得る。」（カストロ 1995）と話している。またハイブリディティが大切なのは、「それが生み出されるもとになった、二つの位置に遡っていけるからではなく、むしろ、第三の空間としてのハイブリティティが、新たに他の位置を生じさせるからである」[4]（戴 1999：106）とバーバは述べている。「ハイブリッドなアイデンティティは、本質的なものを探究することはせず、アイデンティティのプロセスの中にある異質性を照らし出し、新たに差異を生み出し、そのプロセスを閉鎖することなく、逆に、絶えず開いていくものである。」という。（戴 1999：107）現代にハイブリディティが生じたのは上記にあるような差異を植民地時代のように抑圧するのではなく差異を認め、それが新しい方向に変化しつづけることを受け入れ、可能にする自由があるからだ。

植民地時代はいかに植民地の文化に適応するかが、生活する上で重要であった。しかしながら、仮に真似ても似ているが異なるものと他人は評価する。自分と植民者、また自分自身にも矛盾が生じて他者の意識がはっきりと芽生えていったのだと思う。現在の移民は出身国と新たな土地での文化的な差異を経験して、従来の帰属意識とは違う新しい感覚を見つけている。また植民地時代と比較すると支配的な態度や偏見もかなり少なくなって自由になっている。そのため祖国とのアクセスも頻繁に簡単にでき、国家間の移動もとてもスムーズになった。そのようなディアスポラ的な経験により、自分と他者の接触が増えて自分のアイデンティティの内部に新しい文化的契期としての差異が生まれたと私は考える。自分のルーツに戻ることよりも、その新しい差異をどう扱っていくかが重要になっていくと思う。

[1] 『ディアスポラの知識人』に Hall, Stuart "Minimal Selves," p.44 より引用。
[2] 『多文化主義とディアスポラ』に Hall ,Stuart. 1990 "Cultural Identity and Diaspora." *Identity: Community, Culture, Difference.* Ed. Jonathan Rutherford, 222-237. London: Lawrence&Wishart より引用。
[3] 『多文化主義とディアスポラ』の著者戴エイカは、ホール（1998）の著書 123 頁から引用しているが、正確な出典は不明である。
[4] 『多文化主義とディアスポラ』に Bhabha, Homi K. 1990. "The Third Space." *Identity: Community, Culture, Difference.* Ed. Jonathan Rutherford, 207-221. London: Lawrence&Wishart より引用。

参考文献

青木保等　『幸福　変容するライフスタイル』　岩波書店　2003年
阿部斎、高橋和夫　『国際関係論』　放送大学教育振興会　1997年
有満保江　『オーストラリアのアイデンティティ　文学にみるその模索と変容』　東京大学出版　2003年
アントニー・D・スミス（高柳先男訳）『ナショナリズムの生命力』　晶文社　1999年
アンドレア・センプリーニ（三浦信孝、長谷川秀樹訳）『多文化主義とは何か』　白水社　2003年
石川栄吉等　『オセアニアを知る事典』　平凡社　2000年
伊豫谷登士翁等、『グローバリゼーションの中のアジア』　未来社、1998年
梅棹忠夫　『世界民族問題事典』　平凡社　1995年
越智道雄　『オーストラリアを知るための４８章』　明石書店　2000年
小倉充男　『国際移動論』　三嶺書房、1997年
梶田孝道　『国際社会学』　放送大学教育振興会　1995年
カズオ・イシグロ　『わたしたちが孤児だったころ』　早川書房　2001年
小杉泰等　『アイデンティティ　解体と構成』　岩波書店、2002年
杉本良夫　『オーストラリア　多文化主義の選択』　岩波書店　2000年
スチュアート・ホール他（宇波彰監訳）『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』大村書店　2001年
関根政美　『多文化主義の到来』　朝日新聞社　2000年
関根政美　『マルチカルチュラル・オーストラリア』　成文堂　1991年
載エイカ　『多文化主義とディアスポラ』　明石書店　1999年
田丸徳善等　『国際化時代のアイデンティティ』　春秋社　1998年
辻井喬等　『市場　トランスナショナル化する情報と経済』　岩波書店　2003年
富山太佳夫　『現代批評のプラクティス４　文学の境界線』　研究者出版　1996年
中西直和　『オーストラリア移民文化論』　松籟社　1999年
初瀬龍平　『エスニシティと多文化主義』　同文館　1996年
初瀬龍平　『国際関係論のパラダイム』　有信堂　2001年
ビル・アシュクロフト他（木村茂雄訳）『ポストコロニアルの文学』　青土社　1998年
複数文化研究会　『複数文化のために　ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院　1998年
古田暁等　『異文化コミュニケーションキーワード』　有斐閣　2001年
レイ・チョウ（本橋哲也訳）『ディアスポラの知識人』　青土社　2000年
ロビン・コーエン（角谷多佳子訳）『グローバル・ディアスポラ』　明石書店　2001年
スチュアート・ホール（小笠原博毅訳）：「文化的アイデンティティとディアスポラ」pp 90~103 現代思想(1998)　No.26.　4.

Broinowski, Alison. 1992. *The YELLOW LADY Australian impressions of Asia.* South Melbourne: Oxford University Press

Castro, Brian. 1992. *AFTER CHINA.* North Sydney: Allen&Unwin Original Fiction

Castro, Brian. 1995. *Writing Asia; and, Auto/biography: two lectures.* Canberra: University College, Australian Defence Force Academy